

祖を予が如き習慣が整んじらねたが、或は其の余祿が
ながわらもつてあろう。

それにしては佐伯氏及初代惟庸以来、永く堅田の以
月宇山の事たり、或は及上城寺田の目とり居住して
いざであらうと思はれるに、その歴代も墓所もい
ものはどこにもない。もつとも、室町時代或は遊つて
鎌倉時代のものと推定される土藪塔も宝塔の類、全く
ないではないか、その殆んどに記録がなく、誰が何時
ころこの村里に採つていたか々と類推するには実は不
便である。

それは今から僅か数百年遡つた時代であるのに、時
の流れというものはかくも歴史を湮滅するものである。
無理もない、明治時代、いや昭和になつてでも、もう
二、三十年遡つた前のごとく薩張りわからんようになつ
ている。このように歴史記録は、資料の散佚亡失によ
つてほとんど忘れ去られ、気がついた時はすでに遅く
もう全く掘り所がなくなつてゐる。

このような歎きをしんじら感じていた天竺き、去る
十一月二十八日私共日芸術短大教授中野隆徳博士の、
「大神姓佐伯氏の源流」と題する講演をきいて、多大
の感銘を覚えた。そしてその中で私は特に豊後武士団
の棟梁として勢威を張つた緒方惟深について、改めて
教へられた。おが佐伯氏の初代惟庸以下歴代の当地方
に於ける勢威は、緒方惟深の宇佐以承のそれと忘れず
あちよくは又昔日の如く豊前豊後全域を風靡しようとの
野望あつてのこと、昨日言かつたが、時日下剋上の風
潮最も旺んな時代であつた。さればしばらくは大友氏
の強大を慶下に甘んじ、或は長駆弘安の役に筑前博多
附近に戦い、或は南北朝のころは筑後川の戦に参加し、
又は重口で肥後に出陣し、慥意よく兵力をたくわえ、

おが佐伯勢は漸次恐畏の勢力となつていふであらう。
かような情勢の時に堅田表に中国大内勢の来寇があつ
たが、実力をこめてこれと撃破した。その後とうけ左第
十代佐伯惟治。祖宅緒方惟深の勢威を思つて、夢よもう
一度とひそかに野望をもたし左であらうことが推察され
るが、これとて裏付けは正確な史料と知らない。そして
失意の裡に日向に落ち、尾高知の峯に於ける終末となつ
たが、悲壯なこのドラマは佐伯の庶民の思慕をもつて永
く語りつがれて来たが、今も漸くそれも薄れつつあるの
ではあるまいか。

十二代惟教父子が有力な大友勢の部将として日州高城
への進撃と敗戦、佐伯勢は不幸にして潰滅的打撃を受け
たが、天正十四年(一五六六年)青年城主佐伯惟定の奮起に
よる堅田合戦、見事島津勢を撃破して胸のすくような報
復と果して、佐伯勢の健在は示されたであつた。

このような悲哀と歡喜の交錯する歴史の中には、私共の先
祖連は番匠の依れを汲み、毎年礼を仰いで約四百年の
時をすごして左であつた。

私はここまで思いを進めて、この度佐伯氏十四代、そ
れは梟雄緒方惟深と合せて「大神姓佐伯氏」と呼んでそ
の位牌を、ゆかり深い菩提所龍護寺に納めた。まことにバ
撤宜に過ぎたことではあるまいか。且て山本有明が主君
惟深の菩提を弔ひごとく結ん左龍護寺に、その惟深と
佐伯氏歴代の位牌が納つた。これを私共は中世における
佐伯氏四百年の歴史を追求するポイントとしたい。

佐伯氏の歴史は、佐伯の山野と共にあつた。そしてそ
の山野には刻るところに佐伯氏と共に生きていた庶民の
哀歌があつた。そこに私共は思念をこめて、これからこ
そ佐伯氏十四代四百年の姿を追究しよう。これを私共佐
伯史談会へ書替とせよようではないか。